

占領下の日本におけるアメリカ黒人部隊をめぐる 人種とジェンダーのポリティクス

— キャンプ岐阜に駐留の第24歩兵連隊を中心に —

Race, Gender, and African American Units in Japan under U.S. Military Occupation:
Focusing on the 24th Infantry Regiment Stationed at Camp Gifu

岡田 泰弘

Yasuhiro OKADA

はじめに

アメリカを中心とした連合国軍による日本占領期（1945年9月から1952年4月）の日米関係は、国家間の非対称的な権力関係により構築され、その後の両国の関係を大きく規定することになった。その一方で、占領下のアメリカ人と日本人の関係では、国家を中心とした、「占領者」と「被占領者」という二項対立的な関係によっては捉えることのできない、人種、ジェンダー、階級、セクシュアリティなど、多様な差異に基づくポリティクスが、占領統治をめぐる国家間、国家内部の権力関係をさらに複雑なものにしていた。

「被占領者」である日本人と同様に、「占領者」である米軍兵士も決して一枚岩な集団ではなかった。その中でも、アメリカ黒人部隊の存在は、敗戦国日本の民主化を使命とする連合国軍による占領統治の矛盾を象徴するものであった。占領軍の一員として日本に駐留していたアフリカ系アメリカ人兵士は、日本人との関係においては「占領者」としての特権的な地位を享受する一方で、自国の軍隊では人種的に隔離され、差別的な待遇を受けるなど、白人支配的な組織の中で従属的な地位に置かれたままであった。「占領者」とし

ての名誉や特権と、米軍内での人種隔離・差別によるスティグマとの狭間において、彼らはいかに「黒人占領軍兵士」としての主体を構築していったのだろうか。

本稿は、占領下の日本におけるアメリカ黒人部隊をめぐる人種とジェンダーのポリティクスを、キャンプ岐阜に駐留の第24歩兵連隊（24th Infantry Regiment）の事例を中心に考察するものである。本稿に関連したこれまでの研究では、アフリカ系アメリカ人兵士が、占領下の岐阜における日本人との日常的な出会い、とりわけ日本人女性との親密かつ性的な関係を通して、いかに人種、ジェンダー、国民アイデンティティを形成していったのかについて明らかにしてきた¹⁾。本稿ではさらに、第24歩兵連隊を中心とした米陸軍内の人種、階級、セクシュアリティをめぐる交錯した権力関係に焦点を当てながら、アフリカ系アメリカ人兵士たちがいかに人種、ジェンダーの主体を構築し、抵抗やエンパワメントの契機を模索していったのかについて検討したい。主な一次資料として、黒人新聞の記事、黒人退役兵士の自伝、米国公文書館所蔵の軍事資料、そして米陸軍による第24歩兵連隊の退役軍人に対するインタビュー調査の記

録を用いた²⁾。

第24歩兵連隊は、南北戦争直後の1869年に創設され、米西戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、朝鮮戦争など、19世紀末から20世紀半ばにかけてアメリカが関わった主要な戦争に参加した、伝統的な黒人戦闘部隊である³⁾。また、第24歩兵連隊は、第二次世界大戦から朝鮮戦争の時期にかけて、アジア・太平洋地域で活躍した代表的な黒人部隊であり、戦争と占領という日米関係の転換期において、日本人との出会いを経験している。第二次世界大戦中は、1942年4月に、基幹基地であるジョージア州のフォート・ベニングから南太平洋戦線に送られた。1944年にはブーゲンビル島で、パトロール中の隊員が日本人兵士と遭遇し、日本軍と戦闘を交えた最初の黒人部隊となった。終戦後は、1946年末まで沖縄での占領任務に携わった後、1947年2月に、大阪を拠点に中部地方の占領を担当する第25歩兵師団（25th Infantry Division）の一部に編入されたことに伴い、キャンプ岐阜に異動となった⁴⁾。さらに、第24歩兵連隊が岐阜に駐留していた1947年から1950年の期間は、米軍の人種政策が黒人兵士の「隔離」から「統合」へと大きく転換していく時期に当たり、米軍内における人種をめぐるポリティクスの変容が、黒人兵士の主体形成に与えた影響を考える上で、興味深い事例を提供するものである。

先行研究の検討

本稿は、アフリカ系アメリカ人の軍事体験、アフリカ系アメリカ人と日本人の関係、そして占領期の日米関係に関する、歴史学を中心とした学際的な研究成果を踏まえつつ、占領下の岐阜におけるアメリカ黒人部隊をめぐる人種とジェンダーのポリティクスに焦点を当てることにより、これらの研究領域に新

たな問題群を提起するものである。

まず、アメリカ黒人軍事史の分野では、黒人兵士の隔離と統合をめぐる米軍の人種政策と、アメリカ国内外の戦争における黒人部隊の活躍や貢献に関する研究に、これまで重点が置かれてきた⁵⁾。また、アメリカ黒人女性・ジェンダー史研究の著しい発展の中で、軍隊や戦争におけるアフリカ系アメリカ人兵士の男性性（masculinity）の社会的構築について論じたものが、第二次世界大戦、ドイツの軍事占領、ベトナム戦争などに関する研究において、いくつか発表されている⁶⁾。しかし、日本の軍事占領をアフリカ系アメリカ人兵士の人種、ジェンダー化された視点から考察した研究は、これまでのところほとんど試みられていない。

次に、アメリカ国内および国際関係史の文脈の中で、アフリカ系アメリカ人とアジア人の関係を論じた研究は、近年飛躍的に発展している。アフリカ系アメリカ人と日本人の関係を扱った史的研究の多くが、20世紀前半の日露戦争における日本の勝利、パリ講和会議での日本による人種平等条項の提出、アジアにおける日本の帝国主義的進出、そして太平洋戦争における日米の衝突などの出来事を、アフリカ系アメリカ人政治指導者、知識人、ジャーナリストがいかに人種化された視点から捉えていたのかという点に注目しており、そこでは「人種」と「国家」が主たる分析のカテゴリーとして用いられている⁷⁾。また、近年のアメリカ黒人男性と日本人女性の関係をめぐる文化表象を論じた研究の中には、その性的な側面に焦点を当てたものもあるが、占領期に至るアフリカ系アメリカ人と日本人の関係を扱った史的研究に関する限りにおいては、ジェンダー視点の欠如を指摘することができる⁸⁾。

さらに、歴史家のジョン・ダワーによる

『容赦なき戦争』（原書の出版は1986年）の出版以降、日米関係における人種的要因に多くの研究者の注目が集まってきた⁹⁾。占領研究の領域では、占領期の日米関係における日米双方の人種主義を分析した小代有希子の研究が代表的なものとして挙げられる¹⁰⁾。具体的に、占領期の日本におけるアフリカ系アメリカ人に関する研究では、戦後の日本文学作品（大江健三郎の『飼育』、松本清張の『黒地の絵』、有吉佐和子の『非色』など）における黒人表象や、黒人兵士と日本人女性の結婚、さらには彼らの間に生まれた「混血児」をめぐる日本社会の言説の分析が主要なテーマとなってきた¹¹⁾。また、占領期の日米関係をアフリカ系アメリカ人の視点から分析した研究の多くは、終戦直後の主要な黒人新聞の報道に見られる、原爆投下や日本占領に対する、黒人記者や黒人知識人の反応を中心に考察している¹²⁾。ところが、これまでの研究の多くは日本人による黒人表象や、黒人メディアにおける日本表象の分析を主眼としており、戦後の日米関係の再構築過程における、アフリカ系アメリカ人兵士の役割や主体性（エイジェンシー）に焦点が当てられることはほとんどなかった¹³⁾。

第24歩兵連隊に関する先行研究の中では、ウィリアム・ボウワーズ、ウィリアム・ハモンド、ジョージ・マックガリグルによる『黒人の兵士と白人の軍隊－朝鮮における第24歩兵連隊』（1996年）が、同部隊の岐阜での駐屯地生活の分析に1章を割いて論じている。本書は、朝鮮戦争における第24歩兵連隊の役割について、偏見によって歪められたこれまでの公式な歴史解釈を再検討し、人種的によりバランスのとれた観点から同部隊の軍事行動を再評価するプロジェクトの報告書である。著者たちは、米軍内の人種隔離と偏見が、部隊内で指導力が効果的に発揮され、戦

闘任務の遂行において必須な隊員間の信頼関係が形成されるのを妨げる主たる要因であったと結論づけている。また、占領下の日本に駐留していた第8軍所属の他の部隊と同様に、占領任務を中心に構成された緊張感の欠如した生活が、薬物の乱用、アルコール依存症、性病の蔓延、闇市場での取引などさまざまな問題を生み、十分な戦闘態勢が整わない状態で前線に送り出されたことが、戦争初期に大量の敵前逃亡者を生むなどの問題につながったと指摘している¹⁴⁾。

しかし、本書は第24歩兵連隊の岐阜での駐屯地生活については、朝鮮戦争における戦闘態勢の不備がいかにかという、軍事戦略的な観点のみに基づき分析している。しかも、黒人兵士と日本人の関係については、ほとんど言及していない。それに対して、本稿はキャンプ岐阜における第24歩兵連隊の体験を、アフリカ系アメリカ人兵士の人種、ジェンダー的主体の構築という、軍事社会史的な観点から再考することを目指している。そこで、上記のプロジェクトのために実施されたインタビュー調査の記録を、著者たちとは異なる視点から読み直すと共に、黒人新聞の記事や黒人退役兵士の自伝など、新たな資料を活用している。

第二次大戦後の米陸軍における人種隔離の存続

1947年1月20日、第8軍司令官のロバート・アイケルパーガーは、黒人部隊である第24歩兵連隊を、白人のみで構成される第25歩兵師団に統合する計画を発表した。第8軍の人種統合に向けた計画は、第二次大戦後の米軍における黒人兵士の活用に関するギレム委員会（Gillem Board）の提言に基づくものであった。アルヴァン・ギレムを議長として、陸軍省長官のロバート・パターンソンにより設立された同委員会は、1割の割合で黒人を勧

誘することや、師団レベルで黒人部隊の統合を実現していくことなどを求めていた¹⁵⁾。

しかし、この決定に対して、主要な黒人新聞である『ピッツバーグ・クーリエ』紙は、社説において、同部隊が人種的に隔離された状態のまま白人中心の師団に配属されたにすぎないことから、一般的に考えられるような意味での人種統合とは到底言えないものであると主張し、米軍の人種政策の矛盾を厳しく批判した。同紙によれば、軍隊における人種統合とは、分隊（squad）や小隊（platoon）といった編成の末端レベルでも、黒人と白人の兵士が人種の区別なく配属されることを意味していたのである¹⁶⁾。また、当時岐阜に駐留していたある黒人兵士は、『ボルティモア・アフロアメリカン』紙に宛てた手紙の中で、「人種統合」に関心を抱いているのは黒人のみであると述べ、第24歩兵連隊が当時取り組んでいた「斬新な実験」を、「不毛な言い訳」にすぎないとして痛烈に皮肉った¹⁷⁾。

このように黒人メディアや黒人兵士から批判を浴びたように、第24歩兵連隊を第25歩兵師団に編入するという本計画は、実際には米陸軍による黒人部隊の追認を意味するものでしかなかった。この計画が依拠しているギレム委員会報告も、米軍の伝統的な人種隔離政策の是非にまで踏み込んだものではなく、黒人部隊を解体することなく、師団レベルで人種統合を促進することを提言したにすぎなかった¹⁸⁾。さらに、ハリー・トルーマン大統領は、1948年7月に大統領行政命令第9981号を発して、軍隊内における人種差別の禁止を宣言したが、第8軍において同令が即座に厳格に施行されることはなかった。実際には、朝鮮戦争中の1951年10月に、軍事戦略上の理由により白人部隊に統合される形で解隊されるまでの間、第24歩兵連隊は黒人部隊として存続し続けることになる¹⁹⁾。

第24歩兵連隊は新たな占領任務のために沖縄を離れ、日本本土に上陸したが、そこでの拠点となったのがキャンプ岐阜である。キャンプ岐阜（正式名称はCamp Majestic）は、旧陸軍各務原飛行場（現在の航空自衛隊岐阜基地）に建設された米軍基地で、1947年2月から1950年7月までの約3年半の間、第24歩兵連隊の基幹基地となった²⁰⁾。当時は岐阜以外にも、仙台、東京、横浜、座間、神戸、京都、奈良など、日本各地に点在していた米軍基地に黒人部隊は駐屯していたが、それらの多くは非戦闘部隊であった²¹⁾。キャンプ岐阜には、第24歩兵連隊を含め、戦闘工兵部隊、医療部隊、憲兵隊、軍楽隊など、9つの黒人部隊が駐屯していた²²⁾。その中で、第24歩兵連隊以外にも、第77戦闘工兵中隊（77th Engineer Combat Company）、第94歩兵大隊（94th Infantry Battalion）、第95歩兵大隊（95th Infantry Battalion）という、3つの黒人戦闘部隊が岐阜を拠点としていた。占領期の日本には7つの黒人戦闘部隊が駐屯していたが、そのうちの4部隊が岐阜に集まっていたことになる²³⁾。岐阜での任務開始となった最初の月である1947年2月時点での第24歩兵連隊の兵力は、102名の士官、2名の准士官、3,263名の兵卒から構成されていた²⁴⁾。

キャンプ岐阜において、第24歩兵連隊の兵士たちは他の8つ黒人部隊に加え、第25歩兵師団に属する2つの白人部隊と基地を共有することになったが、そこでの体験は軍事任務や訓練のみならず、住まいや娯楽など社会生活のあらゆる面において人種的に分離されたものであった²⁵⁾。先に引用した黒人兵士は、キャンプ岐阜は「あらゆる現実的な目的のために、隔離された、純粋な黒人コミュニティ」であると述べ、黒人部隊と白人部隊の軍事的、社会的接触や交流が極めて限定的なものであったことを示唆している²⁶⁾。また、

別の黒人兵士の証言によれば、黒人兵士たちはキャンプを共有していた他の白人部隊とも、7月の独立記念日や5月の軍事パレードの日に、第25歩兵師団の本部がある大阪で行われる特別な行事を除いては、ほとんど接触する機会はなかったようである²⁷⁾。

黒人部隊と白人部隊の間で社会的分離が進行していたことにより、黒人兵士たちは岐阜での占領任務や戦闘訓練に従事している限り、白人兵士との間で人種的な衝突を回避することができた。ある黒人兵士は、1948年10月に『アフロアメリカン』紙に宛てた手紙の中で、岐阜では人種間の暴力的な衝突はあまり起こらなかったことを示唆している。これは同年7月に同紙に掲載された、ドイツ駐留の黒人兵士をめぐる緊迫した状況を報じた記事に対する投稿であった。その記事によれば、ドイツでは偏見や隔離が原因で、黒人兵士による扇動的行為 (agitation) が頻発していたのであった²⁸⁾。

彼らが白人兵士との間で暴力的な衝突を経験したのは、岐阜を離れて大都市での任務に赴き、そこに駐留する白人部隊と接触した時であった。第24歩兵連隊に所属し、退役後は公民権活動家として活躍したアイボリー・ベリーは、彼らと白人部隊との間で衝突が生じたのは、決まって横浜や東京に滞在中だったと回想している²⁹⁾。特に、1948年7月にパレードに参加するために上京した際に、部隊全体が第1騎兵師団や第11空挺師団所属の白人兵士との衝突に巻き込まれ、人種差別的な暴言や暴行を受けた出来事は、多くの兵士の記憶に鮮明に残っている³⁰⁾。

このように、キャンプ岐阜のアフリカ系アメリカ人兵士たちは、米軍の人種隔離政策や駐屯地の地理的孤立により、白人至上主義的な社会環境から一定の距離を置くことができた。それにより、彼らの男性性を剥奪するよ

うな人種抑圧的な言動や暴力から比較的守られるような状況の中で、人種、ジェンダー的な主体を構築することが可能となったのである。

黒人士官の任命とリーダーシップ

第24歩兵連隊では、過去の黒人部隊と比較して数多くのアフリカ系アメリカ人兵士が士官 (commissioned officer) として任命された。1947年5月の時点で、69名の白人士官に対して、65名の黒人士官がおり、その内訳は中佐 (lieutenant colonel) 1名、少佐 (major) 1名、大尉 (captain) 20名、中尉 (first lieutenant) 19名、少尉 (second lieutenant) 18名、准尉 6名 (chief warrant officer 5名, junior grade warrant officer 1名) であった³¹⁾。第24歩兵連隊の全士官に占める黒人の割合は、1947年6月の52%から、1949年3月の40%の間で推移した³²⁾。先述した黒人兵士は、第24歩兵連隊の例を挙げながら (彼は同部隊の黒人士官の割合は約60%だと述べている)、岐阜における黒人士官の積極的な任命に対して肯定的な評価を下している³³⁾。

しかし一方で、黒人兵士たちは配属や昇進などの人事面で、引き続き人種差別的な障壁に直面することになった。第24歩兵連隊では、黒人兵士は下士官 (noncommissioned officer) 以下の低い階級では、白人と競合することがなかったために、比較的順調に昇進することができた。ところが、士官レベルになると、昇進の機会は人種的要因により大幅に限定された。黒人士官が白人士官を指揮するような地位に任命されることは、一部の例外を除き、原則としてなかった。黒人士官の昇進のほとんどは、分隊や小隊を指揮する尉官級 (company grade) 止まりで、佐官級 (field grade) まで昇進した者はごく少数にとどまった。また、少佐や大尉に任命された黒

人士官に対して、同階級の白人士官と同等の地位や指揮権が与えられることはほとんどなかった。さらに、士官の間ではインフォーマルな人種隔離のルールが存在しており、士官専用のクラブでも黒人と白人の間にあまり交流は見られなかったようである³⁴⁾。

このような状況の中で任命された黒人士官たちは、人種と階級が複雑に交差する米軍内の権力関係の中でリーダーシップを磨き、下士官や兵卒である黒人兵士たちとの間に階級を超えた信頼関係や連帯感を育てていった。第24歩兵連隊所属ではないが、同じ時期に同部隊と共に岐阜に駐留していた、第77戦闘工兵中隊の指揮官であったチャールズ・ブッシー大尉の自伝は、米陸軍の人種政策の転換期における黒人士官のリーダーシップについて考える上で、示唆に富んだ経験を語っている。黒人中隊の指揮官であったブッシーは、軍事任務や訓練に関する事項のみならず、部下の個人的な問題にまで関与することが求められた。例えば、彼はある兵卒の母親から、家族への仕送りが滞っているという相談を受けていた。この兵卒は日本人のガールフレンドとの交際に必要な出費を言い訳に、ブッシーの助言に従おうとはしなかった。しかし、彼は「誰が上官であるか」を知らしめるために、一切妥協することなく、厳しい態度で部下の家族問題に対処したのであった³⁵⁾。

また別の機会には、日本人女性との結婚申請が領事館で受理されないという部下の悲痛な訴えを受け、ブッシーは上官であるホートン・ホワイト大佐に協力を要請した。ここで彼は、この案件をあえて人種に関わる問題として提起することはせず、結婚によりもたらされる兵士の士気の高揚や性病罹患率の減少など、軍務遂行上のメリットを挙げることで、ホワイトに対する説得を試みたのであった。ブッシーの経験が示しているよう

に、黒人の士官たちは、黒人兵士間の馴れ合いを避けるために階級的な上下関係に常に意識的であったり、部下の問題を解決するために白人の上官に掛け合うなど、米陸軍内の複雑な人種・階級秩序の中で、リーダーシップのスキルを磨いていったのであった³⁶⁾。

基地内における黒人コミュニティ・文化の形成

キャンプ岐阜に駐留のアフリカ系アメリカ人兵士たちは、教会、新聞、音楽など、人種隔離された軍隊の内部に、文化的アイデンティティを表現し、人種的連帯感を育むためのさまざまな空間を創出していった。まず、キャンプ岐阜には黒人従軍牧師付きの教会が設立され、黒人兵士の信仰の拠り所となると同時に、黒人のコミュニティー・センターとして機能していた。この教会には少数の白人兵士も通っていたが、信徒の大多数は黒人兵士であった。黒人の従軍牧師により礼拝が執り行われ、その様子はアメリカ本国の黒人教会さながらであったようだ³⁷⁾。黒人を中心とした聖歌隊も組織され、そこには軍属や兵士の家族と思われる黒人女性の姿も見られた³⁸⁾。

黒人従軍牧師は礼拝を司るのみならず、日本人女性との結婚を希望する兵士に対してカウンセリングを行い、結婚認可の過程に関与するなど、黒人兵士の駐留生活に多大な影響力を持つ存在であった。1950年の朝鮮戦争勃発後、日本人花嫁に対する移民政策が緩和された時期に、従軍牧師のサラス・ワシントン大尉は、数少ない黒人指揮官の地位にあったハリー・ロフトン中佐と共に、黒人兵士の結婚申請が受理されるために尽力した³⁹⁾。黒人教会は歴史的にも黒人コミュニティの制度的中心として重要な役割を担ってきたが、ここでも黒人従軍牧師を中心とする教会は、兵士間のスピリチュアルな絆を築き、彼らが直面

する問題に積極的に関与するなど、黒人兵士たちの精神・物質的生活の両面に渡り、拠り所となる存在となった。

教会と共にキャンプ岐阜の黒人コミュニティの成立、発展に大きく寄与したものに、黒人新聞の存在が挙げられる。そのタイトルや内容など詳細については不明だが、第24歩兵連隊では、黒人兵士の手による独自の新聞が発行されていたようである⁴⁰⁾。また、これまでの議論の中で岐阜に駐留していた黒人兵士からの投書をいくつか引用してきたように、アメリカ本国で発行されていた黒人新聞は、岐阜の黒人兵士たちの間でも定期的に読まれていたと推測される。著者の調査によれば、占領期に主要な黒人新聞3紙（『ボルティモア・アフロアメリカン』、『シカゴ・ディフェンダー』、『ピッツバーグ・クーリエ』）に、日本に駐留していた黒人兵士に関する記事が掲載されたのは、占領開始直後の1945年9月以降と、朝鮮戦争勃発後の1950年7月以降の時期に集中している。これらは、軍事占領や朝鮮戦争というアメリカの有事に際して、黒人新聞各社が特派員を日本や韓国に派遣したことにより、日本の黒人兵士に関する記事が増加したものと考えられる。その他の時期には、地元出身の黒人兵士の昇進や帰還に関する情報や、いくつかの黒人部隊の動向が、時々写真付きで報じられる程度であった。黒人新聞は、岐阜のアフリカ系アメリカ人兵士が地元の黒人社会の出来事について知る上で貴重な情報源となり、また投書を通じて日本での様子を伝える手段にもなったように、太平洋を挟んだ国際的な黒人コミュニティの形成において重要な役割を果たした。

岐阜に駐留していた他の黒人部隊の中には、軍楽隊の一員として従軍していた黒人ミュージシャンもいた。基地内では黒人ミュージシャン同士がジャム・セッションを行うなど、黒人

音楽の世界を展開していった⁴¹⁾。彼らが所属する軍楽隊も、日本に駐留していた他の黒人部隊と同様に、人種的に隔離されていた。黒人軍楽隊のメンバーは、第25歩兵師団に付随する形で第8軍の軍楽隊に同伴し、日本各地で演奏していた⁴²⁾。また、著名なジャズのアルト・サクソフォン奏者であるキャノンボール・アダレーが、第291軍楽隊の一員として岐阜に駐留していたという、興味深い証言もある⁴³⁾。

非戦闘分野におけるパフォーマンスの評価

アフリカ系アメリカ人兵士たちにとって、スポーツや行進など、非戦闘的なパフォーマンスによる活躍は、白人兵士との関係において人種的プライドを獲得し、「男らしさ」を証明する上で重要な役割を果たした。アイボリー・ペリーは、第24歩兵連隊が米軍主催の競技大会のあらゆる種目においてトップであったことや、独立記念日に連合国軍最高司令官であるダグラス・マッカーサー元帥の目で行ったパレードについて誇らしげに回想している⁴⁴⁾。しかし一方で、黒人兵士の中には、戦闘分野では白人部隊に比べて不当な評価しか得られなかった黒人部隊にとって、スポーツと行進は彼らが名誉を獲得できる唯一の機会であったと語り、これらの分野における第24歩兵連隊の過大評価に対して批判的な見方をする者もあった⁴⁵⁾。

第24歩兵連隊のスポーツチームの強さは、第8軍所属の部隊の間で定期的に開催された野球、ボクシング、バスケットボール、フットボールなどの競技大会の場で発揮された。この背景には、スポーツの分野における隊員の活躍を司令官としての誇りにしていたという、マイケル・ハロラン大佐の存在があった。ハロランは、アスリートとしての才能がある隊員に対しては、軍事任務や訓練より

も、競技の練習やコンディションの調整を優先するよう指示していた⁴⁶⁾。特に、第24歩兵連隊のボクシングチームの強さは軍内でも高く評価されており、米軍の準機関紙である『星条旗新聞（太平洋版）』も、1947年6月に彼らに関する特集記事を掲載し、その活躍を称賛した⁴⁷⁾。戦闘部隊であるにもかかわらず、司令官であるハロランを含めた軍の上層部からは戦闘分野での活躍を期待されず、また白人部隊と比べても正統な評価を得られなかったアフリカ系アメリカ人兵士にとって、ボクシングを始めとした競技大会は、白人部隊との競合において、公正なルールの下で「男らしさ」を証明できる数少ない機会であった。

また、さまざまな機会に披露された第24歩兵連隊の行進は、その独特なスタイルゆえに、駐留米軍関係者の間で名声を博していた。『アフロアメリカン』紙特派員のブラッド・ローズが報じているように、1950年6月に羽田の空軍基地で行われた軍事パレードの日のイベントでは、正装した第24歩兵連隊の登場が、日本全国から集まった部隊による行進の最大の山場となった⁴⁸⁾。先述のペリーの回想にもあるように、東京でのパレードは、兵士たちにとって特に記憶に残るものとなった。そこに旗手として参加していたある兵士は、第24歩兵連隊は行進の後方に位置していたが、彼らがコーナーを曲がったところでダブルキックを踏むと、観客から拍手喝采を受けたと語っている⁴⁹⁾。また、別の兵士は、同部隊の行進を目にしたマッカーサー元帥が、「これまで見た中で最高のパレード部隊だ」と述べたと証言している⁵⁰⁾。第24歩兵連隊では当時、マッカーサーが第8軍本部に黒人兵士を配置せず、また岐阜を訪れようとしなのは、彼の人種偏見が原因であると噂されていた。黒人兵士の間では「人種差別主義者」として名高かったマッカーサーからも高い讚

辞を受けたことは、彼らにとってはこの上ない名誉であったと想像できる⁵¹⁾。

このような第24歩兵連隊の行進に対する高い評価には、またしてもハロラン大佐が関係していた。彼は同部隊が本拠地の岐阜で毎週土曜日、多い時には週に2日パレードを行うなど、頻繁に行進の練習をさせていたようだ⁵²⁾。戦闘部隊としての評価にはあまり期待できず、行進やスポーツなど非戦闘的なパフォーマンスによる活躍に望みを託さざるを得なかった、黒人部隊を率いる白人司令官としてのハロランのプライドが、そのような分野で黒人兵士たちが名誉を獲得するチャンスを与える一方で、黒人部隊に対する人種偏見をさらに強化することになった。

軍隊における同性愛

占領下の日本、沖縄におけるジェンダーとセクシュアリティの問題を扱う近年の研究は、占領軍兵士向けの売春施設の設置、街娼の管理、兵士による性的暴力、性病対策など、米軍兵士と日本人女性の性的関係をめぐる実態、表象、および政策について明らかにしてきた⁵³⁾。また一方で、米軍兵士と日本人女性の親密な交際や結婚に関する研究にも注目が集まっている⁵⁴⁾。後述するように、占領時代のキャンプ岐阜周辺の歓楽街においても、米軍兵士相手の売春が盛んに行われていた。また、岐阜に駐留していた黒人兵士の中には、地元の日本人女性と交際、婚約、そして結婚した者もあった。しかし、米軍兵士と日本人女性の性的かつ親密な関係に焦点が当てられる一方で、占領下の日本における米軍兵士の同性間での性的関係について考察されたことは、これまでほとんどなかった。ここでは、第24歩兵連隊および第77工兵中隊を例に、キャンプ岐阜に駐留の黒人部隊における同性愛行為の実態および性的アイデンティ

ティの構築について論じたい。

キャンプ岐阜の第24歩兵連隊では同性愛者に対して比較的寛容で、同性間の性的行為が頻繁に行われていたと多くの兵士が証言している。兵士らの証言によれば、ゲイの兵士は部隊の中でも人事、炊事、医療関係の部署に多く見られたという。彼らは、同僚の兵士たちからは“sissies”と呼ばれていたが、この言葉には男性性の欠如を侮蔑する意味合いが含まれていた⁵⁵⁾。異性愛者である兵士の中には、彼に好意を抱いたと思われる同僚の兵士から、訓練中に性的ニュアンスを感じるようなジェスチャーを送られた経験から、部隊内の同性愛者に対してあからさまな嫌悪感を抱く者もいた⁵⁶⁾。また一方で、彼らの行動が任務遂行に支障をきたしたり、異性愛者の兵士との間でトラブルを起こさない限り、同性愛者の存在を容認する者もあった⁵⁷⁾。

第24歩兵連隊における同性愛者に対する比較的寛容な雰囲気背景には、異性間性行為を介した性病の蔓延が部隊内で深刻化していたことがあった。米軍基地周辺の他都市と同様に、岐阜でも売春は性病蔓延の温床となっていた。同部隊の高い性病罹患率に悩まされていた軍上層部は、他のいかなる問題以上に、性病対策と性病罹患率に対する懲罰には厳しい態度で臨んでいた⁵⁸⁾。同性愛をめぐる米軍の政策は、第二次世界大戦を契機に、「同性愛行為者」(sodomist)の犯罪化から、「同性愛者」(homosexual)の病理化へと大きく転換していた。それにより、軍精神科医によって「同性愛者」と診断された兵士は、「不名誉な除隊」として処分されるようになった⁵⁹⁾。終戦後、米軍の反同性愛政策はより組織的なものとなり、1947年から1950年代初めにかけて、米陸軍と海軍における同性愛者の除隊率は、第二次世界大戦期と比べて3倍以上に増加した⁶⁰⁾。しかし、軍上層部に

とっては、部隊内の同性愛者を取り締まることよりも、性病の蔓延の方が士気の低下や兵力の損失に関わるより深刻な問題であった⁶¹⁾。それに加え、ハロラン司令官の黒人兵士に対する人種偏見が、士官を含めたゲイの黒人兵士の容認、あるいは無関心ともとれる態度に結びつuitたと考えられる⁶²⁾。

キャンプ岐阜に駐留の黒人部隊における、同性愛者に対する軍上層部の許容的かつ無関心な態度は、第77工兵中隊の司揮官であったチャールズ・ブッシー大尉の回想によっても裏付けられる。彼が率いる部隊では、あるゲイの兵卒の活発な性行動をめぐる、同性愛嫌悪に基づくバッシングや、性的パートナーをめぐる争いが生じていた。この兵卒は自らの同性愛的傾向を理由に「名誉ある除隊」を申し出たが、第8軍の上層部は同性愛に関する軍の罰則規定に基づき勧告を与えただけで、除隊申請は却下された。このような上層部による非介入の決定に対して、隊員の士気低下の問題に早急に対処しなければならなかったブッシーは、軍事司法統一法典(UCMJ)の規定に基づき、この兵卒に対して「不適切なふるまい」のかどで、拘禁や減俸などの非司法罰を科すことにより、事態の収拾に努めたのであった⁶³⁾。

軍隊での生活は、これまで地元のコミュニティの中で自らの性的志向を隠して生活してきたゲイの兵士にとって、他の同性愛者と出会い、また性的行為を経験することを通して、自らの性的アイデンティティを模索し、確立する契機となった。もちろん、軍隊において同性間の性行為を経験したすべての兵士が、自らを同性愛者として認識していたわけではない。日本占領の時期にあたる冷戦初期は、軍隊内の同性愛者のみならず、反共産主義闘争の文脈における安全保障上の理由から、連邦政府内の同性愛者に対する抑圧が激

しく行われた時代であった⁶⁴。このようなアメリカのゲイにとって受難の時代に、占領下の日本に駐屯していた黒人部隊において、性病の蔓延や白人司令官の人種偏見ゆえに、同性愛行為や同性愛者の存在が容認されていたという事実は注目に値する。

日本人との出会い

ここまでキャンプ岐阜に駐留のアメリカ黒人部隊について、第24歩兵連隊を中心とした米陸軍内部のポリティクスを中心に論じてきた。最後に、アフリカ系アメリカ人兵士の人種、ジェンダー的主体の形成について考える上で欠かすことのできない、黒人兵士と日本人の関係についても簡潔に触れておきたい。

アメリカ社会における人種差別の中で「二流市民」としての扱いを受けてきたアフリカ系アメリカ人兵士であったが、占領軍内での人種や階級の違いに関わらず、占領期のアメリカ人と日本人の関係は、基本的には「占領者」と「被占領者」という非対称的な権力関係に基づき構築された。彼らは、白人兵士と同様に、連合軍占領軍の一員として日本人に対するさまざまな政治的、経済的特権を享受し、行使していく中で、アメリカ人としての国民アイデンティティを強く自覚していくことになった⁶⁵。

その一方で、戦前は一部の黒人指導者から、白人支配的な国際秩序における有色人種のリーダー的存在と目されていた、「非白人国家」である日本での体験は、多くのアフリカ系アメリカ人兵士にとって、自らの人種アイデンティティを見つめ直す機会となった。彼らの中には、黒人に対する日本人の差別意識を敏感に感じとる者もあったが、日本において本国では経験しえないような人種寛容的な雰囲気と接することにより、多くの黒人兵士が日本人に対して概ね肯定的な印象を抱く

ことになった。また、それまで海外に出たことのなかった多くの黒人兵士にとって、日本人との出会いは、自らの人種意識や世界観を国際的な視野において再編する契機となった。アラバマ州の農村部で生まれ育ったアイボリー・ペリーは、日本の大学での学生や教授との交流を通して、アメリカの人種主義が普遍的なものではなく、文化的に偶発的なものにすぎないと認識するに到った。ペリーは、日本人との出会いを通して、アメリカ南部社会の抑圧的な人種関係を相対化する視点を獲得したが、それは彼が本国に帰還後、反人種差別闘争に深く傾倒していく契機を孕むものであった⁶⁶。

また、地元の日本人女性との親密かつ性的な関係の形成は、軍事占領という文脈におけるアフリカ系アメリカ人兵士の男性性の構築の中心的な舞台となった。占領下の岐阜においても、他の米軍基地周辺のコミュニティと同様に、米軍兵士と日本人女性の間には、人種や国境を越えた親密な関係が形成された。第24歩兵連隊では、連合軍総司令部による反フラタニゼーション政策が、士官以外の兵士には厳格に適用されなかったことから、下士官や兵卒を中心としたアフリカ系アメリカ人男性と、地元の日本人女性の間で親密な交際が発展した。その中でも日本人女性との結婚を決意した者は、日本人家族からの反対のみならず、日本人花嫁をめぐる米国政府や米陸軍によるさまざまな制度的、法的障壁を乗り越えなければならなかった。黒人兵士の中には、彼らの結婚申請がなかなか受理されない原因として、黒人男性の異人種間の性的関係に対する、軍や政府の人種偏見の関与を指摘する者もあった。そのような状況の中で、彼らの結婚のために積極的に動いたのは、先述したような黒人上級士官や従軍牧師であった⁶⁷。

さらに、米軍兵士による日本人女性の買春は、人種を問わず、被占領国の女性の性的な征服を通して、占領国の男性兵士としての「軍事化」された性的主体を確立する契機となった。占領時代のキャンプ岐阜周辺の歓楽街では、日本人の証言者や歴史家による推定値に幅はあるものの、占領軍を追いかけて市外から流れてきた者を含めて、1,000人以上の売春婦が米軍兵士を相手にしていた。米軍兵士にとって、売春婦を中心とした日本人女性との性的関係は、日本人男性の去勢化を通して征服者としての男性性を確立するのと同時に、他の兵士との間にホモソーシャルな連帯を形成する手段となった。その一方で、第24歩兵連隊における性病罹患患者に対する厳格な処罰と、白人医師による性病検査の実施は、黒人兵士の人種的プライドを傷つけ、彼らの男性性を損なうものであった⁶⁸⁾。

おわりに

—黒人帰還兵の公民権運動へのかかわり

占領下の岐阜において、アフリカ系アメリカ人兵士は、連合国軍の一員として獲得した国民的名誉や特権と、米陸軍内での隔離や差別により付与された人種的スティグマとの狭間において、人種、ジェンダー的主体を構築していった。彼らは日本人との関係のみならず、米陸軍内の黒人兵士の隔離をめぐる、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティが交錯した権力関係に偶発的に生じた空間や状況の中に、抵抗やエンパワメントの契機を見出していった。

第24歩兵連隊では、戦後の米陸軍における人種政策の転換の中で、比較的多くのアフリカ系アメリカ人兵士が士官として任命され、人種と階級が交錯する米軍内のヒエラルキーの中でリーダーシップを磨き、発揮していった。黒人兵士たちは教会、新聞、音楽と

いった、伝統的な黒人文化やコミュニティの制度的資源を効果的に動員しながら、隔離された軍隊の内部に、文化的アイデンティティを表現し、人種的連帯を築くための空間を創出していった。また、戦闘分野において正統な評価を得られなかった黒人兵士にとって、スポーツや行進といった非戦闘分野でのパフォーマンスによる活躍は、白人兵士との競合において「男らしさ」を発揮し、人種的プライドを獲得する機会となった。さらに、同性愛者に対する比較的寛容な雰囲気の中で、ゲイの黒人兵士は、同じ性的志向をもつ同僚の兵士との出会いや性的行為を通じて、自らの性的アイデンティティを確立していった。

占領下のキャンプ岐阜に駐留していた黒人帰還兵の中には、第24歩兵連隊のアイボリー・ペリーのように、当時アメリカ各地で展開しつつあった反人種差別闘争に積極的に関わっていく者もあった。1950年7月、朝鮮戦争に従軍するために岐阜を離れたペリーは、戦闘中に負傷し、軍役から一時退くことになった。その後再入隊した際に、彼はキャンプ仙台に駐留の信号隊に、唯一の黒人として配属され、二度目の日本駐留を経験することになった。しかし、仙台の白人中心の部隊において、彼は白人兵士たちからは“boy”と呼ばれ蔑まれ、彼より階級が下の兵士にも昇進で先を越され、差別を糾弾したことにより上官からは「厄介者」扱いされるなど、岐阜の黒人部隊に所属していた時には経験しなかったような露骨な人種差別に直面することになった。さらに、ペリーはヘロインの所持と命令不服従という、身に覚えのない罪により軍事法廷で懲役2年の判決を受け、最終的には1954年3月に、「不名誉な除隊」となった⁶⁹⁾。

アメリカに帰還したペリーは、1950年代から1980年代にかけて、ミズーリ州セントルイ

スを中心に、住宅、雇用、医療問題など、幅広い分野における人種、経済的な正義の実現を目指して、草の根の公民権活動家として活躍することになる⁷⁰⁾。歴史家のジョージ・リップシッツも指摘しているように、ペリーのような黒人帰還兵を自国における社会変革運動へと駆り立てたものは、アメリカが国際社会で唱える民主主義的な理想と、米国における人種差別的な現実との間のギャップであった⁷¹⁾。また、日本において「占領者」としての地位や特権を享受し、人種寛容的な雰囲気に触れ、人種問題に対する国際的な視野を獲得したアフリカ系アメリカ人兵士が、帰還後に自国の社会で目の当たりにしたのは、国家のために従軍したにもかかわらず、自分たちは相変わらず「二流市民」のままであるという事実であった。

さらに、占領期の日本に駐留した者だけでなく、第二次世界大戦から朝鮮戦争の時期にかけて、他地域での戦闘や占領任務に携わった黒人帰還兵の中にも、ペリーのように、海外での軍事体験を通して目覚めた人種問題に対する正義感や、戦闘意識の高揚から、アメリカ社会における人種差別の撤廃を目指して公民権運動に積極的に参加していく者があった。アフリカ系アメリカ人の軍事体験を扱った最近の研究の中には、黒人帰還兵の公民権運動への関わりについて論じているものもいくつかある⁷²⁾。また、公民権運動に関する研究書や、公民権活動家の自伝、伝記には、運動参加者の軍歴に言及しているものも多い⁷³⁾。このようなアフリカ系アメリカ人の海外での軍事体験と公民権運動の関連については、今後の研究においてさらに考察すべき課題である。

注

1) Yasuhiro Okada, "Race, Masculinity, and Military Occupation: African American Soldiers' Encounters with the Japanese at Camp Gifu, 1947-1951," *The Journal of African American History* 96 (forthcoming).

2) 1980年代後半から1990年代初頭にかけて、米陸軍軍事史センター (U.S. Army Center of Military History) のジョン・キャッシュを中心、約400人の第24歩兵連隊所属の退役軍人を対象としたインタビュー調査が実施された。本調査は、朝鮮戦争における同部隊の役割を、人種的により公平な視点から再評価するプロジェクトのために開始され、聞き取りをされた退役軍人の4分の3はアフリカ系アメリカ人であった。インタビューを記録したテープ、メモ、トランスクリプトの一部は、ワシントンDCにある同センターのライブラリーに保管されている。

William Bowers, William M. Hammond, and George L. MacGarrigle, *Black Soldier, White Army: The 24th Infantry Regiment in Korea* (Washington, D.C.: U.S. Army Center of Military History, 1996), v-ix.

3) 第24歩兵連隊の歴史的背景については, Bowers *et al.*, chap. 1.

4) *Ibid.*, 21-22, 39-42.

5) 代表的な研究として, Gerald Astor, *The Right to Fight: A History of African Americans in the Military* (Cambridge: Da Capo Press, 1998); Bernard C. Nalty, *Strength for the Fight: A History of Black Americans in the Military* (New York: Free Press, 1986); Morris J. MacGregor, Jr., *Integration of the Armed Forces, 1940-1965* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1981); Ulysses Lee, *The Employment of Negro Troops*, (1966; reprinted. Honolulu: University Press of the Pacific, 2004); Richard M. Dalfiume, *Desegregation of the U.S. Armed Forces: Fighting on Two Fronts, 1939-1953* (Columbia, MO: University of Missouri Press, 1969).

6) Steve Estes, *I Am a Man!: Race, Manhood, and the Civil Rights Movement* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2005), chap. 1; Christina S. Jarvis, *The Male Body at War: American Masculinity during World War II* (Dekalb, IL: Northern Illinois University Press, 2003), chap. 4; Timothy L. Schroer, *Recasting Race After World War II: Germans and African Americans in American-Occupied Germany*

- (Boulder: University Press of Colorado, 2007); Maria Höhn, *GIs and Fräuleins: The German-American Encounter in 1950s West Germany* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2002); Herman Graham III, *The Brother's Vietnam War: Black Power, Manhood, and the Military Experience* (Gainesville: University Press of Florida, 2003).
- 7) Mark Gallicchio, *The African American Encounter with Japan and China: Black Internationalism in Asia, 1895-1945* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2000); Reginald Kearney, *African American Views of the Japanese: Solidarity or Sedition?* (Albany: State University of New York Press, 1998); レジナルド・カーニー (山本伸訳) 『20世紀の日本人－アメリカ黒人の日本人観, 1900－1945』五月書房, 1995年; 古川博巳, 古川哲史『日本人とアフリカ系アメリカ人－日米関係史におけるその諸相』明石書店, 2004年; Ernest Allen, Jr., “Waiting for Tojo: The Pro-Japan Vigil of Black Missourians, 1932-1943,” *Gateway Heritage* 15 (Fall 1994): 16-33; and “When Japan Was ‘Champion of the Darker Races’: Satokata Takahashi and the Flowering of Black Messianic Nationalism,” *The Black Scholar* 24 (Winter 1994): 23-46; Gerald Horne, *Race War!: White Supremacy and the Japanese Attack on the British Empire* (New York: New York University Press, 2004), chap. 2 and 5; and “Tokyo-Bound: African Americans and Japan Confront White Supremacy,” *Souls* 3 (Summer 2001): 16-28; George Lipsitz, “‘Frantic to Join... the Japanese Army’: Black Soldiers and Civilians Confront the Asia-Pacific War,” in *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(s)*, ed. T. Fujitani, Geoffrey M. White, and Lisa Yoneyama (Durham: Duke University Press, 2001), 347-377; Yuichiro Onishi, “The New Negro of the Pacific: How African Americans Forged Cross-Racial Solidarity with Japan, 1917-1922,” *The Journal of African American History* 92 (Spring 2007): 191-213; Etsuko Taketani, “The Cartography of the Black Pacific: James Weldon Johnson’s *Along This Way*,” *American Quarterly* 59 (March 2007): 79-106.
- 8) Karen Kelsky, *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams* (Durham: Duke University Press, 2001), chap. 3; John G. Russell, “Consuming Passions: Spectacle, Self-Transformation, and the Commodification of Blackness in Japan,” *positions* 6 (Spring 1998): 113-177; Nina Cornyetz, “Fetishized Blackness: Hip Hop and Racial Desire in Contemporary Japan,” *Social Text* 41 (Winter 1994): 113-139.
- 9) ジョン・ダワー (斎藤元一訳, 猿谷要監修) 『容赦なき戦争－太平洋戦争における人種差別』平凡社, 2001年。
- 10) Yukiko Koshiro, *Trans-Pacific Racisms and the U.S. Occupation of Japan* (New York: Columbia University Press, 1999).
- 11) 日本文学における黒人占領軍兵士の表象については, ジョン・G・ラッセル『日本人の黒人観－問題は「ちびくろサンボ」だけではない』新評論, 1991年, 第1章; マイク・モラスキー (鈴木直子訳) 『占領の記憶／記憶の占領－戦後沖縄・日本とアメリカ』青土社, 2006年, 第3章; 古川, 第3部第9章を参照。「混血児」に関しては, Yukiko Koshiro, “Race as International Identity?: ‘Miscegenation’ in the U.S. Occupation of Japan and Beyond,” *Amerikastudien* 48 (Spring 2003): 61-77; and *Trans-Pacific Racisms and the U.S. Occupation of Japan*, chap. 5; 加納実紀代「『混血児』問題と単一民族神話の生成」恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性－政策・実態・表象』インパクト出版会, 2007年, 213-260頁; 古川, 第3部第2章。
- 12) 古川, 第3部第1章; Gallicchio, 203-205; Kearney, 123-126.
- 13) 占領期の日米関係における人種とジェンダーの問題を, アフリカ系アメリカ人による日本人女性の表象を中心に論じたものとして, 以下の拙稿を参照。Yasuhiro Okada, “‘Cold War Black Orientalism’: Race, Gender, and African American Representations of Japanese Women during the Early 1950s,” *The Journal of American and Canadian Studies* 27 (2009): 45-79.
- 14) Bowers *et al.*, 64-65, 263-266.
- 15) “Army Integrates Troops: Mixed Division Formed for Peace Duty in Japan,” *Baltimore Afro-American*, 1 February 1947; “24th Joining U.S. Forces in Japan,” *Pittsburgh Courier*, 1 February 1947; Dal-fume, 150-151.
- 16) “The Saga of the 24th,” *Pittsburgh Courier*, 22 February 1947.

- 17) "Poor Excuse," *Baltimore Afro-American*, 24 May 1947.
- 18) Dalfiume, 151.
- 19) 第24歩兵連隊の解隊の過程については, Bowers *et al.*, chap. 10.
- 20) *Ibid.*, 42.
- 21) 1946年8月の時点で, 10,993人のアフリカ系アメリカ人がGHQおよび第8軍に配属されていた。もっとも多くは黒人兵士がいたのは横浜で, 1949年3月の時点で26の黒人部隊が駐屯していた。Report of Tour of Pacific Installations to the Secretary of War, Robert P. Patterson, 8 November 1946, RG 165, entry 13, box 299; "Location of Negro Troops in Japan," 31 January 1949, RG 335, entry 5, box 72; "The Negro in the Army," April 1949, RG 319, entry 2, box 499, National Archives and Records Administration, College Park, MD, USA (以下NARA).
- 22) "The Negro in the Army."
- 23) 残る3つの黒人戦闘部隊は, 横浜と奈良の基地を拠点としていた。 *Ibid.*
- 24) Annual History of the 24th Infantry Regiment for 1947, 2 March 1948, RG 407, entry 427, box 21132, NARA.
- 25) Bowers *et al.*, 42-43.
- 26) "Poor Excuse."
- 27) Interview, John Cash with Alexander Shearin, 17 August 1988, U.S. Army Center of Military History, Washington, D.C., USA (以下CMH).
- 28) "Report From Pacific," *Baltimore Afro-American*, 23 October 1948; Oliver Stewart, "Segregation Hurts Army: Ollie, Leaving Germany, Bares Occupation Wrongs," *Baltimore Afro-American*, 17 July 1948.
- 29) Interview, John Cash with Ivory Perry, 8 September 1988, CMH.
- 30) Interviews, John Cash with Willard D. Carter, 24 September 1988; John Cash with Wilfred Matthews, 23 September 1988; John Cash with Albert S. Kimber, 11 March 1989, CMH.
- 31) "65 Officers Serve 24th Infantry Regt. in Japan: Lt. Col. R. L. Pollard of Washington, Deputy Commander at Camp Majestic," *Baltimore Afro-American*, 31 May 1947; "24th Infantry in Japan Numbers 65 Race Officers," *Pittsburgh Courier*, 31 May 1947.
- 32) Bowers *et al.*, 56.
- 33) "Report From Pacific."
- 34) Bowers *et al.*, 48-49, 55-57.
- 35) Charles M. Bussey, *Firefight at Yechon: Courage and Racism in the Korean War* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1991), 58-62.
- 36) *Ibid.*, 62-65.
- 37) Interviews, John Cash with W. A. Bobo and Mrs. Bobo, date unknown; John Cash with Richard L. Fields, 18 August 1988, CMH.
- 38) "Chapel Choir of 24th Infantry at Camp Gifu," *Baltimore Afro-American*, 23 April 1949.
- 39) この2人の黒人士官は兵士たちの結婚を強く支持していたが, その背景には米軍兵士が朝鮮戦争に出兵した後に残された日本人婚約者と, 彼らの間に生まれた「混血児」の置かれた経済的苦境に対する懸念があった。L. Alex Wilson, "Lovesick GIs Marry 400 Japanese Girls," *Chicago Defender*, 4 November 1950; and "Why Tan Yanks Go For Japanese Girls: Wilson Reveals Story Behind Love Affairs Between Tan Yanks And Oriental Beauties," *Chicago Defender*, 11 November 1950.
- 40) Bowers *et al.*, 50.
- 41) "GI Jam Session," *Pittsburgh Courier*, 2 August 1947.
- 42) Interview, John Cash with Walter Bufford, 13 March 1989, CMH.
- 43) Interview, Cash with Shearin.
- 44) Interview, Cash with Perry.
- 45) Interview, Cash with Fields.
- 46) Bowers *et al.*, 51.
- 47) *Pacific Stars and Stripes*, 15 June 1947.
- 48) Bradford Laws, "Display of Real Integration: Far East Mixed Units Show Military Might," *Baltimore Afro-American*, 10 June 1950.
- 49) Interview, John Cash with Howard Rouge, Jr., 14 October 1988, CMH.
- 50) Interview, Cash with Carter.
- 51) Interviews, John Cash with John "Tommy" Martin, 12 January 1990; Cash with Bufford, CMH.
- 52) Interview, John Cash with Waymon Ransom, 5 August 1988, CMH.
- 53) 代表的な研究として, 恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性』; 菊地夏野『ポストコロニアリズムとジェンダー』青弓社, 2010年; 林博史「東アジアの米軍基地と性売買・性犯

- 罪」『アメリカ史研究』第29号（2006年），18-35頁；林博史「アメリカ軍の性対策の歴史－1950年代まで」『女性・戦争・人権』第7号（2005年3月），94-118頁；サユリ・ガスリ・シミズ「性の国家管理をめぐる占領期日米関係－アメリカの海外軍事進出とジェンダー」『軍事史学』第41巻4号（2006年3月），26-49頁；Yuki Tanaka, *Japan's Comfort Women: The Military and Involuntary Prostitution during War and Occupation* (New York: Routledge, 2002), chap. 5-6.
- 54) 島田法子編『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道－女性移民史の発掘』明石書店，2009年；安富成良，スタウト・梅津和子『アメリカに渡った戦争花嫁－日米国際結婚パイオニアの記録』明石書店，2005年；林かおり，田村恵子，高津文美子『戦争花嫁－国境を越えた女たちの半世紀』芙蓉書房出版，2002年。
- 55) Interviews, John Cash with William Shepard, 27 October 1988; John Cash with Fred Thomas, 24 August 1989; John Cash with Roscoe Jones, 16 June 1989; Cash with Rouge; Cash with Ransom, CMH.
- 56) Interview, John Cash with James Perkins, 28 July 1989, CMH.
- 57) Interview, John Cash with Richard W. Saxton, 3 December 1988, CMH.
- 58) 兵士の証言によれば，第24歩兵連隊では，初めて性病にかかった者は「VDキャンプ」と呼ばれる特別施設に収容され，そこで8週間の厳しい訓練が課された。2度目の性病罹患が発覚した者は，従軍牧師のもとに送られ，また家族にも連絡がいった。そして，3度目の罹患により，「不名誉な除隊」となった。Interview, Cash with Thomas; Bowers *et al.*, 52-53.
- 59) Allan Berube, *Coming Out under Fire: The History of Gay Men and Women in World War Two* (New York: Free Press, 1990), esp. chap. 5.
- 60) *Ibid.*, 262.
- 61) このような状況の中で，第24歩兵連隊司令官のハロラン大佐が，「いっそのこと兵士たちがみな同性愛者になれば，性病の問題も解決されるだろうに」と言ったという兵士の証言がある。Interview, Cash with Jones.
- 62) 彼の部下が黒人士官の間にはびこる同性愛問題に対して厳しい対処を求めたのに対して，ハロランは「もしやつらを排除すれば，残るクロンボはバカばかりで，部隊が機能しなくなるのではないか」と，黒人兵士に対する人種偏見を露呈するような発言をしたという証言がある。Interview, Cash with Ransom.
- 63) Bussey, 65-69.
- 64) Berube, 260-270. 冷戦期アメリカの同性愛をめぐるポリティクスについては，以下の研究も参照。John D'Emilio, *Sexual Politics, Sexual Communities: The Making of a Homosexual Minority in the United States, 1940-1970*, second ed. (Chicago: University of Chicago Press, 1998); David K. Johnson, *The Lavender Scare: The Cold War Persecution of Gays and Lesbians in the Federal Government* (Chicago: University of Chicago Press, 2004).
- 65) Okada, "Race, Masculinity, and Military Occupation."
- 66) *Ibid.*
- 67) *Ibid.*
- 68) *Ibid.*
- 69) Interview, Cash with Perry; George Lipsitz, *A Life in the Struggle: Ivory Perry and the Culture of Oppression*, rev. ed. (Philadelphia: Temple University Press, 1995), 57-63.
- 70) Lipsitz, *A Life in the Struggle*, chap. 3-8
- 71) Lipsitz, "Frantic to Join... the Japanese Army," 367.
- 72) Maria Höhn and Martin Kimke, *A Breath of Freedom: The Civil Rights Struggle, African American GIs, and Germany* (Palgrave Macmillan, 2010); Robert F. Jefferson, *Fighting for Hope: African American Troops of the 93rd Infantry Division in World War II and Postwar America* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008); Estes, *I Am a Man!*, chap. 1.
- 73) 代表的なものとして，John Dittmer, *Local People: The Struggle for Civil Rights in Mississippi* (Urbana: University of Illinois press, 1994); Charles M. Payne, *I've Got the Light of Freedom: the Organizing Tradition and the Mississippi Freedom Struggle* (Berkeley: University of California Press, 1995); James Forman, *The Making of Black Revolutionaries* (1972; reprinted. Seattle: University of Washington Press, 1985); Nelson Peery, *Black Fire: The Making of an American Revolutionary* (New York: New Press, 1995).